となりのお姉さんとぼく

栃木市立栃木第五小学校
六年　高森亜門（たかもりあもん）　男

ピンポーン。

ぼくが宿題をしていると、祖父母の家のインターホンがなった。ぼくは、この家によく泊まりに来る。二人のことが大好きで、一緒にいると落ち着くのだ。けれど一番の理由は、年を取っている二人のことが心配だからだ。

げん関を開けると、となりの家のお姉さん

が立っていた。お姉さんは三人家族で、祖父母と、とても仲が良い。大雪の日は、家の前の雪かきをしてくれたり、留守の間、郵便受けを見てくれたりなど、ぼくと同じように祖父母のことをいつも気にかけてくれている。

「おたくの庭のネットに小鳥がかかってしまったみたいで。助けてあげてください。」

と、お姉さんはとてもあわてていた。ぼくは、急いで庭に出た。そこには、庭の木をあおっているネットにからまった小鳥が、バタバタ

と苦しそうにもがいていた。灰色の羽にオレンジのくちばし、スズメよりも少し大きい。

ぼくは、急いで軍手をはめるとハサミでネットを切り始めた。お姉さんは、フェンスごしに心配そうに見ている。小鳥は、ぼくが手を出すと、大声で鳴き、暴れ出した。何をされるか分からない、きょうふを感じているのだ。

「大丈夫だよ。大丈夫。すぐに助けてあげるからね。」

と、ぼくは小鳥に何度もやさしく声をかけた。

暴れる小鳥の羽を傷つけないよう、しん重にハサミを入れる。小鳥もふるえているが、ぼくの手もワナワナとふるえていた。

小鳥の首に巻きついていた最後のひもが切れると、小鳥はピタリと動くのをやめた。自由になったことにおどろいているようだった。しかし、次のしゅん間、勢い良くぼくの手から飛び上がった。ぼくは、羽を傷つけていなかったことにホッとした。小鳥は、そのまま飛んで行ってしまうと思ったが、祖父母の家

のフェンスにとまるとひと鳴きし、そして、お姉さんの家のフェンスに飛び移るとひと鳴きし、それから広い空へ飛び立っていった。

「声をかけてくれて、ありがとうございました。おかげで小鳥を助けることができました。」

と、ぼくはお姉さんにお礼を言った。お姉さんの笑顔を見て、ぼくは、じんありどうれしい気持ちになった。

お姉さんが小鳥を見つけ、声をかけに来てくれたのは、いつも祖父母のことを気にかけ、行き来してくれているからだ。祖父母の部屋には、お姉さんの成人式の写真がかざってある。となり同士、仲良く思いやっていることが、よくわかる。

「いつも祖父母を気づかってくれて、ありがとうございます」と、今度お姉さんに会った時、祖父母に対し、いつもやさしい親切な気づかいをしてくれていることに言に出して、感謝しようと思った。